

鳥取砂丘ランドデザイン

平成22年11月1日

鳥取砂丘再生会議

目 次

鳥取砂丘グランドデザインの策定にあたって	・・・	1
鳥取砂丘の現状と特性	・・・・・・・・	1
鳥取砂丘の歴史	・・・・・・・・	1
鳥取砂丘を取り巻く環境とその変化、地域特性等	・・・	2
鳥取砂丘グランドデザイン	・・	3
「特別保護地区等中央エリア」	・・・・・・・・	4
「多鯨ヶ池エリア」	・・・・・・・・	5
「鳥取砂丘 西側エリア」	・・・・・・・・	6
「鳥取砂丘 東側エリア」	・・・・・・・・	7
「鳥取砂丘 全エリア共通」	・・・・・・・・	8
おわりに	・・・・・・・・	9

鳥取砂丘グランドデザインの策定にあたって

鳥取砂丘再生会議は平成20年10月に制定された「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」を契機に鳥取砂丘の保全再生と適切な利活用に向け、県民との協働による取組を推進するため平成21年1月に設置されました。

山陰海岸ジオパークの一角を占める「鳥取砂丘グランドデザイン」を策定するにあたり、鳥取砂丘再生会議は、これまで鳥取砂丘景観保全協議会と鳥取砂丘新発見伝実行委員会が取り組んできた各種の事業展開を継承しつつ、砂丘中心部は100年後にあっても昭和30年代の天然記念物指定及び国立公園指定当時のような「砂の動く生きている砂丘」を基本に考えています。

そして、県民の理解と協力の下に県民が愛着と親しみを共有することのできる「鳥取砂丘の残していきたい姿」をイメージし、県民の砂丘への想いの共通認識化を図るとともに、課題や問題点を多角的な視点から整理、検討し、鳥取砂丘の保全再生と適切な利活用の促進についてできることから取り組むこととしています。

鳥取砂丘の現状と特性

(1) 概要

山陰海岸国立公園は、京都府奥丹後半島基部の網野海岸から鳥取県鳥取砂丘に至る延長約75kmに及び、変化に富んだ海岸線を有しています。

この山陰海岸国立公園の西端に位置する鳥取砂丘は、東西16km、南北2.4kmの大砂丘であり、明瞭な形の砂丘列の高低差(起伏)、すり鉢状の凹地、風の織りなす芸術、風紋や砂簾なども訪れる多くの観光客を魅了しています。

戦後に本格的に植林された飛砂防備保安林の影響や外来植物の侵入等による草原化、さらには、海域からの砂の供給量の減少により、砂丘本来の美しい景観が損なわれるところとなり、その保全再生の取組として県民によるボランティア除草などが行われています。

これらの取組により「砂の動く生きている砂丘」の復元は着実に進められ現在に至っています。

(2) 鳥取砂丘の持つ価値、魅力

自然・環境資源としては、全国的な誘致力がありますが、その魅力や環境を保全再生することの理解が県民に十分伝わってはいません。

鳥取砂丘が天然記念物に指定された理由である、「起伏の大きさ」、「独特なスリバチ地形」、「海岸砂地植物群落」、「風紋・砂簾のような現象」、「形成過程を探求できる地質構造」などの要素を奥深い魅力として、科学的に分かり易く、そして県民に砂丘に親しみを持てるように伝えて行くことが必要です。

鳥取砂丘の歴史

(1) 成り立ち

鳥取砂丘を歩くと、今から約5万年前にまだ大山が火山として噴火活動していた時代に鳥取砂丘に降り積もった“大山倉吉軽石”が露出しているスポットが砂丘内に点在しています。その地層を挟んで下位の「古砂丘」と上位の「新砂丘」に二分することができます。

特にこの火山灰地層の断面が露出している「砂丘ユニオン」裏手には、約9万年前の九州阿蘇山の火山灰、約10万年前の鳥根県三瓶山の火山灰が混入しており、古砂丘は約10万年以前に形成されていたことが読み取れます。鳥取砂丘は10万年以上もの時間をかけて自然の営みにより創造された世界的に貴重な海岸砂丘です。

(2) 砂との戦い、文化財と国定公園の指定

鳥取砂丘の中から、古くは縄文土器らしきものも発見されるなど、砂丘で人々が活動していたことが分かります。

江戸時代からは、砂丘からの飛砂を防止するための植林が行われるようになりましたが、本格的な鳥取砂丘への植林事業が実施されたのは戦後になってからです。

昭和20年代には、砂丘一面を植林化する計画もありましたが、砂丘保護の機運が盛り上がり、追後スリバチ、長者ヶ庭、合わせヶ谷スリバチを結ぶ三角地帯の約30haが昭和30年に国の天然記念物に指定され、植林化から免れるとともに植林されていない約100haの砂丘部分が、同年、山陰海岸国定公園に指定されました。

その後、昭和38年に国立公園に昇格し、今では、砂丘中心部131haが特別保護地区として厳しい規制の下、大切に保護されています。

(3) 昭和30年代から現在

砂丘地周辺の飛砂防備保安林の成長と相まって、砂丘の砂の動きが変化してきました。また、本来、砂丘では見られない外来植物などが増加しました。砂の動きを促進させるため、昭和47・48年度、57・58年度の2回にわたり、西側保安林の伐採が行われました。

その跡地からは、その後の草原化の一つの起因となる雑草の種子が供給されることとなり、平成3年頃には砂丘の約42%が緑で覆われる状況にまで深刻化しました。国や県、鳥取市、福部村（当時）で構成する鳥取砂丘管理調査協議会（後に鳥取砂丘景観保全協議会）では、平成3年から試験除草を、平成6年から本格的に除草活動を実施しています。

平成16年からは県民との協働によりボランティア除草を開始し、平成22年には5,000人を超える人々が鳥取砂丘の保全再生活動に取り組んでいます。

参考：鳥取砂丘の歴史については、鳥取県砂丘事務所ホームページ

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=100183>も参照ください。

(4) 「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」の制定と鳥取砂丘再生会議

県民参加による保全再生の取組が活発化している反面、砂丘利用者のマナーが低下し、特に鳥取砂丘の景観のシンボルである通称“馬の背”斜面に足跡で文字や図形を描く落書きが相次いで発生しました。

鳥取県が世界に誇れる至宝「鳥取砂丘」を後世に守り伝えていく上で大切なのは、砂丘利用者一人一人が鳥取砂丘の持つ独特の風物への愛着と畏敬の念を共有して節度ある利用に努めるとともに、協力し、連携し合っ、自然を守り育てていくことです。

県民を初めとするすべての砂丘利用者が人々の協働により鳥取砂丘の保全と再生を推進し、適切な利用を増進することを通じて、その多面的価値の向上を図り、鳥取砂丘の優れた環境を次世代に確実に引き継いでいくため、県は「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」を制定し、平成21年4月から施行するとともに、現地に砂丘事務所を設置しました。

この条例の制定を機会に鳥取砂丘に関わる関係団体、地元、行政等、幅広い参加の下に鳥取砂丘の保全再生と適切な利活用の促進に向けた取組を進めるため、鳥取砂丘再生会議が平成21年1月に設立されました。様々な人々との協働による取組の推進エンジンとして、次の世代につなげる取組を実施しています。

鳥取砂丘を取り巻く環境とその変化、地域特性等

(1) 環境意識の高まり

鳥取砂丘では、外来植物の侵入、砂丘前面の海岸の浸食、県民・観光客等の鳥取砂（の環境保全）に対する意識変化等、砂丘を取り巻く環境は大きく変化しています。様々な機会を捉えて、次世代を担う子どもたちに自然保護についての学習・教育の場の提供や関わりを持たせていくことが必要です。

(2) 観光動態の潮流

鳥取砂丘は団体観光客をメインとした通過型観光地となっており、今後は一地域の観光名所を中心とした「点」の観光から、地域住民とのふれ合い、農業収穫や多様な遊び等の体験メニューを提供する交流型観光の素地形成が課題です。

全国的に団体型観光から個人型観光（旅行会社の企画旅行から個人組立旅行）にシフトしていく中、鳥取砂丘が「自然・名勝」であるがために見学、行楽を主眼とする昼間立寄型の観光地の域を脱せず、結果、経過地点となって滞在時間が短く鳥取市周辺を含めて必ずしも宿泊観光に結びついてはいないと考えられます。

(3) 世界ジオパークネットワーク加盟による地域活性化の動き

山陰海岸国立公園を中心とした山陰海岸ジオパークの個性豊かな地形・地質の特徴、価値が認められ、世界ジオパークネットワークの加盟が実現しました。今後は、地域資源を再認識する教育やジオツーリズムなどの地域社会の発展につなげていく多くの取組が、世界を視野に入れた取組へと進化していくことが必要です。

(4) 大交流時代の到来

鳥取自動車道の県内区間の開通等、東アジアや近畿圏との本格的な大交流時代が到来。これを観光客流入増の好機と捉え、外国人観光客の受入環境の整備充実、観光客の滞在時間を増やすため、砂の美術館など砂丘観光の付加価値を高めていくことが必要です。

鳥取砂丘グランドデザイン

鳥取砂丘グランドデザインでは、100年後を見据えた長期的な視点に立って、これだけは残していきたい鳥取砂丘の中心部の姿及び浜坂から岩戸までの異なる個性の4つのエリアの目標と全てのエリアに共通する目標を提示するとともに、概ね10年程度の期間を想定した取組の方向づけを整理、提言しています。

鳥取砂丘の4つのエリア概念図



みんなで守り、育てる美しい鳥取砂丘

鳥取砂丘の残していきたい姿

- ◇砂丘特有の風紋、起伏やスリバチ地形が維持され、自然のサイクルによる「砂の動く生きている砂丘」
 - ・砂のボリューム感、広がり、高低差。いずれをとっても他に例を見ないスケールの砂丘地形を呈しています。
 - ・国内に多数存在する海岸砂丘の中で最も広大な砂丘景観が残り、スリバチと呼ばれる大小の凹地地形が発達。
 - ・風と砂が織りなす風紋、砂簾を形成。
 - ・砂丘本来の姿を残しつつ、まるで生き物のように風が吹けば砂が移動し、決して固定化せず、同じ表情を見せない砂丘。
 - ・その厳しい自然環境の中で砂丘に適応した砂丘植物や動物も生育、棲息しています。

4つのエリアの目標は、次のように設定し、さらに各エリアが連携できる仕組み、取組みを目指します。

- 特別保護地区等中央エリア：「日本一と呼ばれる海岸砂丘」として、その姿・形をいつまでも守り育てます。
- 多鯨ヶ池エリア：砂丘と周囲の山並みを映し出す神秘的な池に光を当てます。
- 鳥取砂丘 西側エリア：幅広い年齢層が集い、憩い、学ぶ空間を創出します。砂の供給と新たな砂丘列の形成を目指します。
- 鳥取砂丘 東側エリア：自然の恵みや豊かさを体験できるもう一つの砂丘の魅力を高めます。

全てのエリアに共通する目標は、多くの人に感動を与える魅力あふれる砂丘を提供し、「何度でも来なくなる砂丘」を目指します。

以下、各エリアと全てのエリアについて、それぞれ現状と課題・目標に向けた取組の方向づけを提言します。

「多鯨ヶ池エリア」



(現状と課題)

- ・多鯨ヶ池は、砂丘と絶妙のコントラストを描き、古砂丘や火山灰地層によって塞がれた堰止湖として貴重な資源ですが、十分に活用されていません。未解明な部分が多く、学術的調査研究が急務です。
- ・生きている砂丘と好対照をなす静かなエリアとして池に人をひきつける工夫が必要です。

(取組の方向づけ)

- (1) 学術的な調査研究に取り組み、魅力を高めます。
 - ・特別保護地区等中央エリアと一体として地学的な解明に取り組みます。
 - ・多鯨ヶ池及び周辺の生態的な調査に取り組みます。
- (2) 観光客に多鯨ヶ池をアピールする取組を行います。
 - ・多鯨ヶ池周辺の眺望改善と人を呼び込む取組を行います。
 - ・多鯨ヶ池エリアの新たな利活用方策の検討を進めます。



県道からの多鯨ヶ池の眺望



現在の周遊道路からの砂丘の眺望



昔の国道からの砂丘の眺望

「鳥取砂丘 西側エリア」



(現状と課題)

- ・山陰海岸国立公園の西端部に位置するエリア。古くは但馬往来の玄関口に位置し、陸軍演習地、旧砲台、有島武郎歌碑、鳥取大学乾燥地研究センター(アリドドーム)の砂漠化防止・緑化研究など、歴史、文芸、環境学習的資源が数多く集積しており、自転車道で結ばれています。
- ・次世代を担う子どもたちが、砂丘をもっと身近に慣れ親しむことのできる公園、自然体験エリア、関わりを深めていくエリアとして活用していく必要があります。
- ・しかしながら、地元の子どもたちが遠足などで砂丘に足を運ぶ機会が減少、砂丘の広がり感・楽しみの享受、各種資源の奥深さが十分周知、活用されていません。
- ・また砂の上だけでなく大きく広がる飛砂防備保安林の機能保全も必要ですが、その管理が十分行き届かない状況にあります。

(取組の方向づけ)

- (1) 砂丘の楽しさを体験しながら、歴史、文芸、環境を学ぶ取組を進めます。
 - ・学校、教育機関と連携して砂丘を楽しむ機会や場の提供を進めます。
 - ・西側エリアの資源を活用し、体験や砂丘との関わりを深める取組を進めます。
- (2) 飛砂防備保安林のあり方を検討していきます。
 - ・砂の動く砂丘や、景観・眺望の観点から保安林のあり方を検討します。
 - ・保安林の活用方策について検討します。



学習の場



有島武郎 歌碑



乾燥地研究センター(アリドドーム)

「鳥取砂丘 東側エリア」



(現状と課題)

- ・多くの観光客が訪れる砂丘のエントランス。情報発信拠点施設「サンドパルとっとり」や「鳥取砂丘ジオパークセンター」、ドライブインなどの主要な観光機能が集積・充実しているエリアです。
 - ・東側エリアには、「福部砂丘」が位置し、クロマツの保安林をくぐり抜けて進む県道からは白砂青松の良好な海浜景観と「らっきょう畑」の景観が広がっています。
- また、湯山池の中、直浪遺跡近くを通過して福部砂丘の高台を縦断する国道9号駟馳山バイパス工事、高速道路網体系の整備が進められています。
- ・来訪者のニーズを的確に捉え、国立公園にふさわしい風格・雰囲気、満足度、砂丘を核として滞在性・周遊性を高める付加価値の高いソフトを充実させ、多様な魅力を提供することが必要です。

(取組の方向づけ)

- (1) 自然景観と調和のとれた商業施設エリアの形成に取り組めます。
- (2) らっきょう畑の眺望、景観を保全しながら、活用を図ります。
- (3) 「砂丘のもつ多様な価値、楽しみ方」をしっかりと伝えていきます。
 - ・地域の素材を活かした取組を進めます。
 - ・滞在性・周遊性を高める取組を進めます。



市営駐車場砂丘入口の状況比較：左は昭和40年代と思われる、右が今の状況



広大な砂丘地に広がるらっきょう畑景観の保全



クロマツ林をくぐりぬける白砂青松のドライブウェーゾーン

「鳥取砂丘 全エリア共通」

（現状と課題）

- ・砂丘に滞在する時間が短く、「砂丘を見て馬の背に行って帰る」という観光客が多いため、砂丘の魅力が十分理解されていません。
- ・観光客・地域住民が砂丘を学び親しむための砂丘学習の機会・仕組みが不足しています。
- ・砂丘及びその周辺の観光素材や、イベント等の観光情報の集約整理が行われていないため、魅力付けが弱く、観光客の利便性も低い状況にあります。
- ・鳥取砂丘の馬の背から日本海を眺めた際、周辺に大きくそびえる工作物が視認できるなど、砂丘という自然景観の中に調和しない景観があります。



（取組の方向づけ）

- （1）滞在時間を増やすための取組を進めます。
 - ・ガイド体制や散策ルートの充実、夜の砂丘の紹介、各エリアが連携した取組などにより、本来の砂丘の魅力を伝え、観光客が歩きたくなる工夫や仕組づくりを行います。
 - ・砂丘ならではの素材を生かし、食の楽しみ、宿泊体験などの新たな観光資源の創出による砂丘地域全体の+αの魅力アップを図ります。
 - ・各ジオサイトと連携したジオツアーの開発等の広域的な観光を推進します。
- （2）砂丘にふれあう機会を充実する取組を進めます。
 - ・砂丘の資源を活かし、あらゆる世代の好奇心を刺激する場を提供します。
 - ・鳥取大学・乾燥地研究センターと連携し、研究の発信、アリドドームの活用を進めます。
- （3）引き出しやすくわかりやすい情報の発信を海外も視野に入れて行ないます。
 - ・砂丘に関する最新情報・既存情報の集約整理をします。
 - ・利用者のニーズに合わせ、砂丘関係者が連携した情報発信を行います。
- （4）鳥取砂丘からの景観との調和を考え、県民の理解と協力のもと、鳥取砂丘や地域景観に配慮した良好な景観形成を推進します。



鳥取砂丘レンジャーによるガイド

おわりに

鳥取砂丘グランドデザインは、県民の方々の意見を取り入れ、常に見直しを行いながら進化するグランドデザインと考えています。鳥取砂丘グランドデザインの実現については、具体的な行動計画を別途策定し、鳥取砂丘再生会議で議論しながら、できるものから取り組んでいくこととしています。

鳥取砂丘再生会議

顧問

鳥取県知事 平井 伸治
鳥取市長 竹内 功

鳥取砂丘再生会議会議員

(民間) 畦崎 俊敬
熊田 一隆
田中 慎一
西田 良平(会長)
安田 雄哉
(地元) 小谷 孝文
田崎 勝治
松永 泉
(大学) 神近 牧男
篠田 雅人
林 喜久治
松原 雄平
(行政) 佐々木 仁
杉本 邦利
瀧山 親則
法橋 誠

鳥取砂丘再生会議保全再生部会会員

(民間) 畦崎 俊敬
熊田 一隆
寺垣 啄生
塚田 比佳里
(地元) 小谷 孝文
田崎 勝治
松永 泉
(大学) 神近 牧男(部会長)
篠田 雅人
松原 雄平
(行政) 佐々木 仁
岡部 哲彦
堀部 晴彦

鳥取砂丘再生会議利活用部会会員

(民間) 畦崎 俊敬
熊田 一隆(部会長)
小谷 寛
田中 慎一
藤縄 匡伸
安田 雄哉
吉田 茅穂子
(地元) 小谷 武
林 建太
松永 泉
(行政) 岡部 哲彦
堀部 晴彦

注) 平成22年11月1日現在

注) 保全再生部会会員、利活用部会会員は再掲している。